

「はじめての言葉」に関する一考察

— 「コミュニケーションの原理」から「言葉」に至る過程について考える—

遠藤 司

目 次

はじめに

I 対象児について

II 2010年2月の関わりでの彼の姿：「はじめての言葉」を作った瞬間

III 考察1 予備的考察：彼が「はじめての言葉」を作るまでの過程

IV 考察2 メルロー＝ポンティの言語論：「はじめての言語」に注目して

V 考察3 彼が「はじめての言葉」を作った時に生きられていた世界
おわりに

はじめに

本論文は、一人の重障児：「彼」との関わりでの場面を基に、彼との関わりのある方を探求しつつ、彼の現に生きている世界の解明を試みた、実践的事例研究である。ある日の関わりでの場面で、彼は、筆者に促されながらではあるものの、自ら「はじめての言葉」を作った。彼が「はじめての言葉」を作ったこの場面は、「文字の学習」、あるいは「言葉の学習」を積み重ねた末にあらわれたものではなく、筆者にとっては、唐突にあらわれたという印象をぬぐいえないような仕方であらわれたものであった。しかしながら、彼が、自分なりの「言葉」をある方法で作ったことは紛れもない事実であると筆者はとらえることができた。このことを受けて、彼の関わり手である筆者は、彼が「言葉」を作ったことの意味について考えなければならなくなった。彼が、なぜこの時に「言葉」を作ることができたのか、そこに至るまでの過程において何が準備されていたのか、さらには、彼にとっての「言葉」とはいかなる意味をもつものであったのか等、考えるべき問題は進んでいき、これらの問題について実際に考察を深めることができたのである。本論文では、「はじめての言葉」というテーマを基に、彼が現に生きていた世界を、「言葉」という視点から深く解明するための考察を進めていくこととしたい。

I 対象児：「彼」について

本論文の事例研究の対象児は、1987年生まれの男性である。筆者は、1993年、学齢前の彼と出会い、以後、彼との関わりを現在まで重ねてくることができた。本論文で主題とする関わりでの場面であるところの、2010年2月の時点までに、筆者は彼と約16年に渡り、年に一回～三回程度ではあるものの、関わりを継続してきた¹⁾。

出会った当初の彼は、仰向け、又はうつ伏せで寝たきりの状態であり、日常生活は全面的な介助が必要であった。感覚面については、聴覚に関しては、周りの音をよく聞いているようであり、予期せぬ音や大きな音がすると、身体をビクッとさせて驚く様子を示すこともあった。視覚に関しては、関わり当初は、明確に見ていると判断できる場面はさほど多くはなかったが、大きなものは認識しているのではないかと判断できる場面もあった。現在は、呈示されたものに顔を向け、明らかにしている様子を示すようにもなった。他者とのコミュニケーションについては、関わり当初、周りからかけられた言葉を理解して行動することは、筆者の見る限りはなかった。また、自ら言葉を発することも筆者の見る限りはなかった。しかし次第に、名前を呼んだり何らかの問いかけをしたりすると、声を出して応えているかのような様子を示すようになり、現在は、何らかの問いかけや言葉かけを彼にすると、彼は、彼なりの声の出し方で応えることが多く見られる²⁾。

関わり当初から現在までの彼の障害の状況や日常生活の様子について、筆者は以上に記したように見ていた。これらのことを基に、筆者は彼に対して適切と考えた課題を呈示し、彼が自ら課題に取り組もうという意志をもって様々な身体運動をおこすことのできる場面を作るよう努めたのである³⁾。

こうしたことを重ねた上で、2010年2月の関わり場面を迎えた。この関わり場面では、彼は自ら「はじめての言葉」を作ったのである。まずは、この場面における彼の姿を記述し、後に、この場面では彼が示したことの意味について考察を進めていきたい。

II 2010年2月の関わり場面での彼の姿： 「はじめての言葉」を作った瞬間

筆者は、彼との関わり場面をもつ際、通常、最寄り駅まで彼とご両親を迎えに出て、そこから関わりが行われる場所までの約15分の道のりを徒歩でもにすることとしていた。この日も、最寄り駅で彼とご両親と会い、徒歩で関わりが行われる場所まで向かうこととなった。しかし、この日は天候が悪く、比較的強い雨が降っている中で、関わりが行われる場所まで向かわなければならなかった。皆で傘をさして歩いていったのであるが、バギーに乗っている彼の顔に水しぶきがかかることもあり、彼はその度に表情を曇らせ、とても嫌がっている様子を示していた。さらに、この日の彼は体調があまりよくなく、時折、咳きこむこともあるほどであった。駅から関わりが行われる場所までの道のりの間、総じて彼は、表情を硬くし、不安そうな様子を示していた。関わりが行われる場所であるところの部屋に到着した時、彼はホッとしたような表情を示し、やっと笑顔を見せるようになった。その後、昼食をとり、休憩した後、筆者が彼に課題を呈示しつつ、通常に関わり場面に入っていた。しかし、彼の体調のことも含めて、この日は良いコンディションで関わりに入ることはできず、関わり手である筆者としては、彼との関わりを良い形で成立させることができるかどうか、若干の不安を抱えたまま、関わりを始めたのである。

関わりを始めた当初、彼は、寝た姿勢でつかんだものを動かしてスイッチを入れチャイムの音を鳴ら

したり、足で板を蹴ってスイッチを入れチャイムの音を鳴らしたりするなど、筆者からの働きかけに応じ、自ら身体運動をおこそうとし、また実際におこしてもいた。この時の彼は、極めて一生懸命に自らの身体を動かそうとし、音が鳴るといふ結果が生じるとうれしそうな表情を示していた。しばらくの間これらのことを行った後、体を起こし、アグラ座位で座るよう促すと、ここでも彼は自ら体を起こそうとし、アグラ座位の姿勢を精一杯保とうとした。この時の彼の表情は真剣そのもので、極めて集中して取り組んでいる姿を示していた。

しかし、アグラ座位の状態では、つかんだものを動かすよう促すと、彼はそれに応じようとはしなかった。さらに、この時点から彼の表情は曇り、不快そうな声を出し、後ろで支えている筆者の身体にもたれようとするなど、明らかにこの状態を嫌がっている様子を示すようになった。ここで、寝た姿勢に戻したり、再び体を起こそうとしたりするなど、様々な試みをしたのであるが、彼の機嫌は一向に良くならず、関わりを一旦中断せざるをえなくなった。ここまで、関わりを始めてから約1時間が過ぎていた。

筆者は、この間の彼の様子を見る限り、体を起こした状態で関わりを続けることは、これ以上は困難であると判断した。さらに、手や足などの身体を自ら動かして外界に働きかける身体運動をおこすことを中心とした関わりを再び行うことも、彼のこの状態を見ると困難なのではないかと考えた。そこで、ここまでの流れとは全く異なる内容の関わりを行うことを考え、筆者は、パソコンの50音の文字選択ワープロソフトを用い、「言葉を作る」ことをテーマとした関わりを行おうとしたのである⁴⁾。

「言葉を作る」ことは、以前の彼との関わり場面においても行ったことはあった。しかし、一つの課題として呈示したことはなく、気分転換や遊びの要素を入れたい時などに呈示していた。この時も筆者は、彼の気分を変え、楽しめればよいという意味で呈示したのであり、何らかの学びや新しいことをおこそうという明確な意図をもって呈示したわけではなかった。

寝た姿勢でいる彼の右側に筆者が座り、彼の右手をとり、筆者の手を握らせた上で、パソコンのスイッチに手を触れさせてスイッチを入れる姿勢を作った

5)。筆者が彼の右手でスイッチを押させて、改めて50音ワープロの説明をした。スイッチを一回押すとあ行の「あいうえお」の音声パソコンから出て、もう一度スイッチを押すと、か行の「かきくけこ」の音声が出て、順に押していくと、さ行、た行、な行・・・というように、50音表にしたがって音声順次出るようになっていく。例えば、「か」の文字を作りたい時は、か行の「かきくけこ」の音声が出た時に、声を出すなり手に力を入れるなりしてか行を選択したことを示すと、そこから、「か」「き」「く」「け」「こ」を順次押していき、「か」の文字の音声が出た時に、再度声を出すなり手に力を入れるなりすると、「か」の文字を選択することができる、以上のことを筆者が彼の右手をとり、スイッチと一緒に押しながら説明した。彼は、筆者の説明とパソコンの音声をじっと聞いている様子で、時折笑顔を見せながらも、深く考えている表情を示していた。

ここで筆者が、「何の言葉を作ろうか、まずは自分の名前を作ってみようか」と問いかけたが、彼はさほど関心がないようで、反応を示すことはなかった。「では、『おかあさん』はどうか、『おかあさん』と作る人」と問いかけると、かすかではあるものの明確に身体に力を入れ、表情を動かし、反応を示したように筆者には見えた。そこで筆者は、彼が、「おかあさん」と作ろうという気持ちになったと判断し、「じゃあ、まずは、『おかあさん』の『お』を探そう」と彼に言い、彼の右手をとり、パソコンのスイッチと一緒に押していった。「『お』のあるところになったら、声を出してくれてもいいし、手を挙げてくれてもいいし、手をぎゅっと握ってくれてもいいし、それで教えてください」と言いながら、彼と一緒にスイッチを押していき、あ行の「あいうえお」の音をパソコンから出し、「『あいうえお』の中にあるかな」と訊いた。しかし彼は、何の反応も示さなかった。そこで筆者はその後にも順にスイッチを押していき、か行、さ行、た行・・・の音を出していったが、最後のわ行の音まで行っても彼は何の反応も示さなかった。筆者は、「もう一度やってみよう」と言い、スイッチをもとに戻して、あ行から順に音を出していった。すると彼は、か行の「かきくけこ」の音がパソコンから出た時に、声こそは出さなかったものの明確に身体に力を入れ、表情を変えた。筆者は、「『かきくけこ』の中にあるのかな」と言いつ

つ、か行を選択するスイッチを押し、「じゃあ、順に訊いていくよ」と言いながらさらにスイッチを押していき、「か」、「き」、「く」、「け」、「こ」の音を順に出していこうとした。「『か』ですか、『き』ですか、『く』ですか、『け』ですか、『こ』ですか」と言いながら彼の反応を見ていたのであるが、彼は特には反応を示さなかった。そこで筆者が、再度「か」から順に訊いていくと、「か」の音の時にかすかではあるが明確に力の入れ方を変え、表情を変えたように筆者には見えた。そこで、「『か』で良いですか」と改めて訊ねると、ここでも手に力を入れ表情も変えたので、彼が「か」を選択したと判断し、パソコンの画面上に「か」の文字を出した。

筆者は、「じゃあ次の文字を選ぼうか、自分で選んでね」と言い、スイッチを操作して、あ行から順にパソコンからの音声を出していった。筆者はパソコンからの音声が出るその都度、「(選びたい文字は)『あいうえお』にありますか」、「『かきくけこ』にありますか」と彼に訊ねていった。すると彼は、「さしすせそ」の音声パソコンから出たときに、声は出さなかったものの、口を動かし手にも力を入れ表情を変えた。そこで筆者は、「『さしすせそ』で良いですか」と言い、スイッチを操作してさ行の文字を順に出しながら訊いていった。彼は、「さ」の音がパソコンから出た時に、手に力を入れ口をモゴモゴと動かすことを繰り返したので、筆者は、彼が「さ」を選択したと判断し、「『さ』で良いですか」と言いながら、筆者がスイッチを操作してパソコンの画面上に「さ」の文字を出した。

筆者は、「今、『か』と『さ』を選びました。次、もう一個いるでしょう。もう一個やろうよ」と言い、再び彼にパソコンの音声をあ行から順に聞かせた。筆者はこの時、「おかあさん」という言葉を選択するよう彼に促していたので、彼が、「おかあさん」という言葉の「お」を略し、また、「あ」も略して「かさ」と選択したのだと判断していた。よって、最後の一文字であるところの「ん」を選択するであろうと予想しつつ、彼にさらなる促しをしたのである。

ここまで行ってきたのと同様に、彼の手をとりパソコンのスイッチに触れさせながら、筆者がスイッチを操作してあ行から順にパソコンからの音声を彼に聞かせていった。すると彼は、さ行の音声は聞こ

えたところで、明らかに手に力を入れ、表情を変えた。そこで筆者が、スイッチを操作し、「さ」から順に音声を出していくと、彼は「せ」のところで笑顔になり、今度は声を出してきた。筆者は、彼が明らかに「せ」を選択したと判断した。この時筆者は、彼に、「おかあさん」と作るよう促していたので、それとは明らかに異なる言葉になるであろう「せ」の文字を選択したことに戸惑いを感じた。しかし、「せ」のところで身体に力を入れるのみならず声を出してまで返事をしようとしている彼の様子を見て、筆者は彼が「せ」を選択したことを疑うことはできなくなり、スイッチを操作してパソコン上に「せ」の文字を選択したのである。

筆者が彼に「『かさせ』になりました。ちょっと予想と違ったね。じゃあ、次の文字をいきましよう」と言いつつ、再び彼の右手をとり、スイッチを操作して、あ行から順に音声を出していった。すると彼は、あ行から順にずっと音声を聞いた後、今度は、ら行のところで明らかに返事をするかのように声を出したのである。そこで筆者は、「ら」、「り」、「る」、「れ」、「ろ」と順に音声を出していくと、彼は、「る」のところで表情を変え、さらに、「ろ」のところでも表情を変えた。筆者が、「もう一回訊かせてね。」と言いつつ、再度、「ら」から順に音声を出していくと、彼は、「る」のところで今度は明らかに返事をするように声を出した。筆者が「『る』で良いかな」と訊くと、彼は、今度は声こそ出さなかったものの、手に力を入れ満足そうな表情を示したので、パソコン上に「る」の文字を選択した。

この後も同様にパソコンの音声を出しながら彼に行を選ばせ、文字を選ばせていくと、彼は次に「ふ」の文字を選択した。この時点で彼は、「かさせるふ」という言葉を作ったのである。ここで筆者が彼に、「『かさせるふ』という言葉になっているけれども、ここで終わりでいいかな、それとも次の文字にいきますか、終わりでよければ終わりと言ってください、作るなら作ると言ってください」と言い、いずれかの答を選択させようとする、彼は、筆者の、「次の文字にいきますか」の問いかけの時に明らかに返事をするように声を出した。そこで筆者は、また同様にパソコンの音声を出しながら彼に文字を選ばせていくと、彼は次に「き」の文字を選んだ。その際、か行を選ぶ時、また、「き」の文字を選ぶ時に、以

前よりも大きな声を出し、身体にも大きな力を入れるようになっていった。さらに、次の文字を選ぶ時、さらにうれしそうな表情を示し、多くの行のところで声を出すなどしていたが、最終的には再び「き」の文字を選んだ。

この時点で筆者が、「『かさせるふきき』になったね、この次もいきますか、それともここで終わりにしますか」と、先ほどと同様に聞くと、彼は、「終わりにしますか」という筆者の問いかけに対して、明らかに返事をするように声を出し身体に力を入れた。そこで筆者が、「かさせるふきき」という音声をパソコンで出し、また、筆者や周りの人が「かさせるふきき」という言葉を声に出して言うと、彼は喜んでまた声を出し、うれしそうな笑顔になった。

この時筆者は、はじめは「おかあさん」と彼に作ってもらおうとしたにもかかわらず、全く異なる言葉になったことに戸惑いをおぼえつつも、しかし、彼が明らかに文字を選んだことは、彼の様子から確信をもつことができていた。つまり、「〇〇という言葉を作ってください」というように促したものの、彼は、一つずつ文字を選び自らの言葉を作ったということ、この時の筆者は確信することができたのである。

ただし、彼の作った言葉であるところの、「かさせるふきき」という言葉の意味は、すぐに明確にはわからなかった。筆者や周りの人は、この日の彼の気持ちに沿うように、また、この日の状況を様々に考えて、いろいろな意見を出していった。この日は天候が悪く、駅から関わりの行われる場所となった部屋に着くまで、傘をさして歩いてきた。彼は雨が嫌い、雨に濡れることを嫌がる傾向があった。またこの日は、彼の体調は必ずしも良好ではなく、咳きこむような場面も見られていた。これらのことを踏まえて、筆者や周りの人が、「傘を自分でさして(セルフでさして)、とても危なかった(危機だった)」ということかな」とあるとか、「雨が『降る』というのを『るふ』と表現して、雨が降っているのが『危機』だったのかな」と考えて彼に問いかけていったのである。周りの人たちのこれらの意見を聞きながら、彼は笑顔を見せ、うれしそうな表情を示していた。皆の意見を聞きながら「かさせるふきき」という言葉が出せたことを喜んでると同時に、皆がそれについていろいろと考えていることに、

つまり、彼の気持ちに沿って彼の考えを理解しようとしていることに彼が喜びを感じているように筆者には見えていた。同時に筆者は、「かさせるふきき」という言葉が、決して意味もなく選ばれた文字の羅列ではなく、彼の中で意味のあるものとなっていることを確信することができていた。彼がその言葉を聞いた時に笑顔を見せていたからであり、また、関わりを行った部屋の最寄りの駅から行動を共にしてきた筆者にとって、様々な状況を思い浮かべることができる言葉でもあったからである。

この日の関わりでは、この後、彼が体を起こした状態でつかんだものを箱に入れるという課題を行った。この時彼は、言葉を作る前のような状態ではなく、再び真剣に一生懸命に身体運動をおこそうとしていた。筆者は、寝た姿勢で言葉を作って、気分が変わり、さらに課題に取り組む気持ちになったのではないかと思ひ、さらには、出したかった気持ちが出せたので、改めて課題に取り組むことができたのではないかとすら思った。その後も少々の課題に取り組んだ後、この日の関わりを終えることとなった。

以上、2010年2月の関わりでの彼の姿を記してきた。この時彼は、「かさせるふきき」という言葉を、筆者のサポートを受けながらではあるものの、明らかに自分の言葉として作った。筆者の知限り、彼が自分の気持ち、考えを示す言葉を作ったのは、この時がはじめてであり、「かさせるふきき」は、彼にとっての「はじめての言葉」であると考えることができた。このことを受けて、筆者は彼とのこの後の関わりのある方を考えるために、この時の彼の生きていた世界について考えなければならなくなった。また、彼が、何故に「かさせるふきき」という言葉を作ることができたのかということも、彼と長年に渡って関わってきた筆者にとって考えるべき課題となった。これらの点に注目して、以下、考察を進めていくこととしたい。

Ⅲ 考察1 予備的考察：彼が「はじめての言葉」を作るまでの過程

まず、2010年2月以前の彼との関わりについて、特に、言葉をテーマとした関わりについて改めて振り返ってみたい。

この時点までに、筆者は彼と、「文字」をテーマとした学習をするには至っていなかった。すなわち、50音表に基づいて文字を並べさせたり、「あ」から「ん」までの文字を一文字ずつ呈示して読ませたり、一文字ずつ指や手でなぞらせたり、一文字ずつ書かせたり等、「文字」そのものを学習することは彼との間では行っていなかったのである。したがって、彼との関わり場面をともにしてきた筆者は、いわゆる「文字学習」の結果、彼が自らの言葉を作ったと考えることはできなかった⁶⁾。

しかし、筆者との関わりで、彼が言葉を解していると判断できる場面が全くなかったわけでは決していない。彼が筆者や周りの人たちからの言葉かけや声かけをよく聞き、それに応じた行動を示すこともあった。例えば、筆者が彼に問いかけ、それに対して彼が声を出して、あたかも返事しているかのようにすることは多く見られた。筆者が、寝た姿勢でいる彼に対して、「椅子に座りますか」と問いかけると、彼は、笑いながら、体から絞り出すような声で力強く返事することがあった。このような時には、その後椅子に座る姿勢をとると、その姿勢を自ら積極的に保とうとし、意欲的に様々な身体運動をおこそうとすることが多かった。しかし、同様の問いかけに対し、しばらく間をあけた後、表情を変えずに、小さな声で返事をしたり、また、筆者の問いかけに対し、全く応えることなく、声を出さないこともあった。このような時には、その後椅子に座る姿勢をとると、その姿勢を自ら積極的に保とうとはせず、むしろこの姿勢を嫌がるかのような様子を見せ、すぐに椅子から降りようとする事すらあった。

筆者の声かけに応じて彼が行動をおこすこともあった。寝た姿勢でいる彼に対して、足で板を蹴ってチャイムの音を鳴らすという課題を呈示した時、筆者が、「イチニツイテ、ヨーイ、ドン」と声をかけると、「ヨーイ」の後に足を曲げ、「ドン」の声に合わせて足で蹴る運動をおこすことを多くの場面で示していた。この時彼は、一連のこの行動がうれしくてたまらないというような表情で、声を出しながら笑顔で身体運動をおこしていた。あるいは、手を動かして板に触れてチャイムの音を鳴らすという課題を呈示した時、筆者が、「イチ、ニイノォ、サン」と声をかけると、「ニイノォ」の後の「サン」の声

に合わせて手を動かす運動をおこすことを多くの場面で示していた。つまり、彼は、筆者からの声かけに応じて自らの身体運動をおこそうとしていたのである。筆者から声をかけられるということの意味を理解しているからこそ、かけ声をきっかけとした身体運動をおこしたのであり、さらには、声かけの違いに応じて、ある場合には足を動かそうとし、ある場合には手を動かそうとするなど、筆者の声かけを聞きわけていたのである。

これらの場面における彼の姿を見ると、筆者からの問いかけや声かけの意味を彼が全く解していないと考えることはできない。なぜならば、彼は筆者からの問いかけに対し異なった返事の仕方をして、異なった返事に応じた行動をしているからであり、また、筆者からの異なった声かけに応じた異なった身体運動のおこし方をしているからである。彼が、筆者のかけた言葉の意味を正確に聞き取り、理解した上で行動していたかどうかは不明である。筆者の発する声のリズムを聞きとり、それに基づいて自らの身体運動をおこしていたと考えることもできる。しかし、筆者の声を単なる音としてではなく、自分に向けられたものであるととらえ、それらを自分の行動をおこすきっかけ、あるいは根拠としていたことは、さらに、自分が応えるべきものとして認識していたということは、明確なこととしてとらえることができる。したがって、この時点で筆者は、自分に向けられた言葉を彼が意味として認識していたことを確信することはできていなかったものの、少なくとも自分に向けられた「言葉」であるということを知っていたことは、確信することができていたのである。

では一方で、彼から発せられる言葉については、つまり、発話についてはどうであったかを振り返ってみたい。彼との関わりの場面において、彼が「音声言語」を発することは、筆者の見る限りなかった。先述のように、様々な場面で、彼が声を出すことはあったが、それらは、他者が明確に意味のある言葉として聞き取ることができるものではなかった。彼の発声は、問いかけに対する返事としてのものが主であり、彼が自ら声を発することは、筆者の見る限り極めて少なかった。

以上、関わりの場面以前の彼の様子を、言葉を作るという点から改めてとらえなおした。筆者は、彼

が、言葉を全く解していないということはないという確信をもっていたがゆえに、様々な語りかけを行い、問いかけをし、それらに対する彼の反応を見てから様々な場面を作るようにしていた。しかし、彼が自分から発話するという点については、音声言語を用いてそれを行うということはほとんどなかった。こうした場面を重ねた上で、2010年2月の場面を、つまり、パソコンの50音ワープロソフトを用いて言葉を作った場面を迎えたのであった。かけられた言葉の理解という点では、彼が何らかのものを有しているという確信をもっていたものの、彼が言葉で何らかの発信をすることについては、確信を全くもっていない状態で、この場面を迎えたのであり、その中で、彼は、「かさせるふきき」という言葉を自ら作ったのである。改めて、このことをどのようにとらえればよいのか考えてみたい。

「言葉を作る」ということについて、特に、「はじめての言葉を作る」ということについて深く考えなければ、この時の彼の生きていた世界を解明することはできない。まずはこの点に注目し、メルロー＝ポンティ⁷⁾の思索を導きとして、考察を進めていきたい。

IV 考察2 メルロー＝ポンティの言語論：「はじめての言語」に注目して

1 言葉をもつとは世界を生きることである

メルロー＝ポンティの初期の言語論は、著書『知覚の現象学』の中で展開されているが、よく言われるように、この中でメルロー＝ポンティは、言葉を、「身体的所作」としてとらえようとしている。例えば、以下の叙述にその考え方が見られる。「言葉は一つの真の所作であって、所作がその意味を内に含んでいるように、言葉もまたその意味を内に含んでいる」(メルロー＝ポンティ、1967、301)、「言葉とは一つの所作であり、その意味するところとは一つの世界なのである」(同上、302)、「言語的所作も他のすべての所作とおなじく、おのれみずからその意味を描き出している」(同上、305)。これらの叙述から読みとれるように、メルロー＝ポンティは、言葉を、「身体的所作」としてとらえ、さらに、その内に「意味」が含まれていることを強調しているのである。だからこそメルロー＝ポンティは、以下の

ようにも述べる。「語は意味をもつ」(同上、291)、「意味は語のなかに住まう」(同上、316)。つまりメルロー＝ポンティは、語そのものが意味をもつのでなければならず、だからこそ、「むしろ、語自体が意味を身に帯びており、それを対象に当て嵌めることによってわたしは対象を捉えたことを意識する」(同上、292)というように、対象よりも先んじて語がもたらされると述べ、「語は、対象および意味の単なる標識であるどころか、事物のなかに住み込み、意味を運搬するものでなければならない。」(同上、292-293)というように、その意味は他に伝達されるものでなければならないとも述べるのである。

メルロー＝ポンティの以上の叙述からわかるように、言葉自体が意味をもつ以上、言葉をもつということは意味をもつことともなるのである。では、この場合の「意味」とはいかなることを意味するのだろうか。

先のメルロー＝ポンティの、「言葉とは一つの所作であり、その意味するところとは一つの世界なのである」(同上、302)という叙述をもとに考えてみたい。この叙述から、われわれは、言葉をもつことは、一つの世界を生きることとなり、その言葉を発するとは、その言葉のもつ意味が主題となるような世界を生きることとなるということを読みとることができる。言葉の指すものが、ある対象であれ、ある事柄であれ、もたらす結果は同様である。われわれは、対象を意味する言葉を発する時、その対象との関係が主題となった世界を生きることとなり、また、ある事柄を意味する言葉を発する時、その事柄が主題となり、その事柄に関与する主体として世界を生きることとなるのである。言葉をもつということは、こうした世界そのものを生きることを意味するのであるということ、メルロー＝ポンティの叙述から学ぶことができるのである。

2 意味の発生：転調

では、われわれは、「意味」をいかに獲得し、その「意味」が主題となるような「世界」にいかにして生きようになるのであろうか。ここで再び、メルロー＝ポンティの叙述に学ぶこととしたい。

「手もちの意味、つまり過去の表現行為の集積が、語る主体たちのあいだに一つの共通の世界を確立しており、現在使われるあたらしい言葉がそれに依拠

することは、あたかも所作が感性的世界に依拠するのとおなじことである。そして言葉の意味とは、その言葉がこの[共通の]言語世界を使いこなす仕方、あるいはその言葉が既得の意味というこの鍵盤のうえて転調する仕方、以外の何ものでもない」(同上、306)。

ここでメルロー＝ポンティは、まず、新しい語という形で新しい意味をもつためには、「語る主体」たちの間に一つの共通の世界が既に確立されていなければならない、この共通の世界とは、「感性的世界」と呼ぶべきものであると述べる。さらに、言葉が意味をもつようになるためには、既にある世界を生きており、その既得の世界で「転調」することによるのであるとも述べるのである。

ここでいう「既得の意味というこの鍵盤のうえて転調する」とは、いかなることを意味するのだろうか。この「転調」といういささかわかりにくい表現について、福田学は、外国語を習得する際の学習者におこっていることを解明するために、メルロー＝ポンティの言語論に依拠しつつ次のように述べている。

「言語使用における転調とは、発話者が自分のいたいことを、当人のいわゆる心的状況や聴き手の態度等に応じてそのつど異なった仕方で、何の苦勞もなくいくつかの言葉を使ってすぐさま表現することができ、しかも、そのつどの表現行為のなかでは、各語がそれぞれ最適の仕方で用いられている、といった事態が典型例となるものである」(福田、2010、110)。このように、メルロー＝ポンティの言であるところの「転調」を解釈した上で、「本来、語の習得とは・・・最終的には、自己の身体を最適の仕方で転調させようようになること」(同上、110)であると述べ、さらに、「言葉の使用は私の身体の転調そのものであり、また、世界内存在としての私の身体が転調するのは、文字どおり感覚的世界の只中であるかぎり・・・言葉は感覚的世界から遊離したものではありえない」(同上、111)とも述べるのである。

福田は、外国語習得の初学者を念頭においているため、母語を語り出す、すなわち人生においてははじめての言葉を発する場合とは、若干異なる場合を想定していることになるかもしれないが、語の習得を「転調」できるようになることととらえ、さらには、

それらが感覚的世界から遊離して行われるものではありえないことを強調して述べていることに注目しなければならないと筆者は考える。

ここで改めてメルロー＝ポンティの叙述に戻って考察を進めていきたい。メルロー＝ポンティは、「あられ」という言葉を獲得する場合を例にとり、「<あられ>という語は、それが私に知られたときも、私が同定のための或る綜合作用によって再認する対象などではなくて、私の発声装置の或る種の行使、世界内存在としての私の身体の或る種の転調のことで」(メルロー＝ポンティ、1974、295)と述べ、言葉を獲得する際には、「この語を分解して、その各部分にそれぞれ調音・発声の一運動を照応させる、といった具合にはではなくて、この音を音響世界のただひとつの転調として聞きとる」(同上、296)という具合にするのである。つまり、一つの言葉を獲得することとは、既に自分が生きている世界に依拠しつつ、身体的所作としての言葉を、今までに獲得し生きることのできた世界に依拠しつつ、一つの言葉として、あるいは一つの意味として、まとまりとして、獲得するのである。ゆえにこのことをメルロー＝ポンティは「転調」と呼んだのであり、われわれが既にある世界を生きているからこそ、それに依拠しつつ新たな意味をもつ語を獲得することができるようになるのだと考えることができるようになる。

では、われわれがまだ共通した世界を生きるまでには至っていない時、つまり、自らが生きる世界がどのような世界であるのかすら示すことができず、感性的世界としても意味的世界としてもおぼつかないものでしかなかった時、われわれはどのようにして身体を「転調」し、新たな言葉を獲得することができたのであろうか。

メルロー＝ポンティは次のように述べている。「やっと話すことを覚えた子供とか、はじめて何事かを語り、考える作家とか、また最後に、或る一つの沈黙を言葉に変えようとするすべての人々とか—こうした人々の経験する、表現や意思伝達のなかにある偶然的なものを、われわれはもはや意識しないようになっていく。にもかかわらず、日常生活のなかで働いているような、構成された言葉というのは、表現の決定的な一歩がすでに完了してしまっていることを、あきらかに想定しているのだ。した

がって、その根源にまで遡らないかぎり、言葉のざわめきの下にもうど始元の沈黙を見いだして来ないかぎり、この沈黙を破る所作を記述しないかぎり、われわれの人間観は、いつまでも皮相なものにとどまるであろう」(メルロー＝ポンティ、1967、302)。

ここでメルロー＝ポンティは、「始元の沈黙」を見出し、その「始元の沈黙を破る所作」を記述することを考えなければならないことを示しているのである。このことについて、メルロー＝ポンティは、特に後期の言語論において、子どもの初語の発生の問題や、人類のはじめての言葉の問題について取りあげ、解明しようとしている。

以下、メルロー＝ポンティが、「人類の最初の言葉」について述べた箇所について概観し、始元の沈黙を破り、言語の世界に入る瞬間にいかなることが起こっているのかについて考察してみたい。このことを考察することこそ、本論文において、はじめての言葉を作った彼の生きていた世界の解明にも重要な意味をもつことになるからである。

3 言葉の始まり

メルロー＝ポンティは、著書『世界の散文』の中で、「人類の最初の言葉」について、「最初の言葉は、この原初の無言のコミュニケーションに対して、そのときまでそれから受けとっていたと同じだけのもの、あるいはそれ以上のものをもたらししてくれた」(メルロー＝ポンティ、1979、64)、「それは新しい世界を開設したわけである」(同上、64)と述べ、「言葉」が、人類にとって言葉のない世界を生きていた時には知ることのなかった、まさに「新しい世界」と呼ぶべきものをもたらししたことを明確に強調している。では、この「最初の言葉」はいかにして生まれたとメルロー＝ポンティは論じているのであろうか。

ここでメルロー＝ポンティは、やや逆説的な表現を用いて、以下のように述べる。人類の最初の言葉は、最初であるにもかかわらず、「それは、すでに多くの人に共通した行為から生れ、すでに私的世界であることを止めた感覚的世界に根を下していた」(同上、64)のであり、「すでに多くの人に共通になっている行為の文脈のなかでその意味を見出した」(同上、65)のである。つまり、メルロー＝ポンティは、人類の最初の言葉は、「コミュニケーション

ンの無」(同上、64)から起こったのではなく、全く何もない状態から突然言葉が発生したのではないことを強調している。もしこのように考えてしまうとすれば、「人間が世界の中で他の人間を光景の一部として知覚するという事実によって、コミュニケーション以前にすでにコミュニケーションの原理が与えられていたということ」(同上、64)を、また、「彼の行為は(私が目撃しているかぎり)私の行為の対象と同じ対象を目指している」(同上、64)のだということを、さらには、「他人の行なうすべては私の行なうこととすでに同じ意味をもっているのだ」(同上、64)ということをおぼろげに忘れているのである。つまりメルロー＝ポンティは、最初の言葉を発する時には、原初的ではあるかもしれないけれども、多くの人に共通のものとなっている感覚的世界を既に生きているのであり、さらに、これもまた原初的であるかもしれないけれども、他者とのコミュニケーションの原理あるいは素地が与えられた世界を生きているということを強調しているのである。

本論文において、はじめての言葉を作った彼の世界を解明しようとしているわれわれは、メルロー＝ポンティのこの論に何を学ばよいかであろうか。ここで再び、福田学の論に目を向けてみたい。

福田は、「人類の最初の言葉」について、メルロー＝ポンティの現象学全体を特徴づける「両義的な観点」が示されていることを指摘している(福田、2010、98)。「はじめての言葉に関するメルロー＝ポンティの両義的な観点は、彼が、人類のはじめての言葉を、『新たな世界を開設』するものであると同時に、『外から何かを借りてくることによってしか』生み出されえなかったものでもある、と述べていることにより、より如実に示されている」(同上、98)。つまり、福田は、メルロー＝ポンティが、人類の最初の言葉という、「いわばそれ以上遡りえない最も根源的な言葉についてさえも、『外部』の、つまりその言葉が生み出される時にいわば既に存在している『世界』の解明が不可欠である、と考えていることが示されている」(同上、98)ことを指摘するのである。

この「外部」の世界とは、先にも述べたように、「すでに多くの人に共通した行為から生れ、すでに私的世界であることを止めた感覚的世界」(メル

ロー＝ポンティ、1979、64)を指すと考えられる。と同時に、この感覚的世界には、メルロー＝ポンティが述べているように、極めて原初的ではあるかもしれないけれども、他者とのコミュニケーションの原理あるいは素地が含まれていると考えることができるのである。

メルロー＝ポンティの論から、また、それに基づく福田の論から、われわれは、はじめて言葉を作った彼の世界を解明するために、彼がその時に既に依拠していたであろう感覚的世界と、既に生きていたであろう原初的コミュニケーションの原理あるいは素地とを解明しなければならないことが明確になった。ここでさらに、言葉の発生以前の世界を生きていた人間が、何故に言葉を発することになったのか、彼らにとっての「新しい世界の開設」によりもたらされたものは何であったのかを、「幼児の模倣」を例にとりながら論じたメルロー＝ポンティの叙述に学びながら、今少し考察を進めてみたい。

4 模倣について

メルロー＝ポンティは、いわゆる「ソルボンヌ講義」の中で、幼児が言葉を獲得していく際に行う「模倣」について、次のように論じている。「模倣することとは、他者と同じようにふるまうということではなく、同じ結果に到達する」ということである(メルロー＝ポンティ、1993、41)。「模倣は身ぶりの全体的結果を目指すのであって、その細部の再現を目指すのではない」(同上、42)。これらの叙述から、メルロー＝ポンティが、子どもが模倣するのは、ただ単に他者の行動をその通りに行うこととしてではなく、その行動がもたらす結果に到達することを目指して他者の行動をまねることとしてとらえていることを理解することができる。このことを言語模倣にも当てはめて考えてみるならば、子どもが他者の言葉をまねるのは、その言葉を発することによりもたらされる結果を目指して、言葉を発するという他者の行為をまねていると考えることができるようになるのである。

さらにメルロー＝ポンティは、「言語を定義しているのは、その使用価値」である(同上、63)とも述べる。言語の使用価値とは、その言語を使用することによりもたらされるものであり、それこそが言語を定義するのである。さらに言うならば、言語を

獲得しようとしている子どもは、言語を模倣しようとしている時点で、その言語の使用価値をも獲得しており、あるいは、使用することによりさらなる価値を認識することともなるのである。

言語のもつ使用価値について、齋藤瞳が、さらに詳細なる論を次のように述べている。「この使用価値とは、自分の意図や相手の意図を伝達—了解しあう場面で価値をもつ手段のことである」(齋藤、2009、136)。つまり齋藤は、言語の使用価値とは、他者と意図を伝達しあい、了解しあうために用いられる手段として認識されるべきものであり、他者とのコミュニケーションの手段として認識されるべきものであると論じているのである。もしそうであるとするならば、言語を獲得する以前の世界に生きている人間が既に獲得しているコミュニケーションの原理について、次のように考えることができるようになる。「自分の意図や相手の意図を伝達—了解しあう」ことこそがコミュニケーションであり、そのために用いられる手段こそが言語である。言語を獲得する以前の世界に生きている人間がはじめての言葉を発する際、言葉を使用することによりもたらされる自分の意図の相手への伝達、あるいは相手の意図の了解という「結果」に到達することを目指し、他者とのコミュニケーションの原理を模倣することとなるのである。再び齋藤の言を借りるならば、「メルロ＝ポンティはただ音を繰り返すという意味での模倣を超えて、言語活動がもつ使用価値を獲得する役割を模倣に見出した」(同上、136)ということができるようになる。言語の使用価値に注目し、模倣により獲得されるものに、あるいは、模倣により獲得を目指すものに注目することにより、言語を獲得する以前の世界に生きている人間がはじめての言葉を発する際の一つの根拠について明らかにすることができるのである。

ここまで考察を進めてきて、われわれは、言葉を獲得する以前の世界に生きていた人間が、何故に言葉が発することになったのかという問いに対して、既に共通の感覚的世界に生きていたからであるという答と、原初的コミュニケーションの原理あるいは素地を既に獲得していたからであるという答をもつことができた。すなわち、メルロー＝ポンティの論を手がかりにして、われわれは、はじめての言葉を

発する人間は、その言葉が無から発するのではなく、互いに共有することのできている世界を既に生きている人間同士として言葉を発し受け取るという関係を見出すに至り、さらに、自分の意図を相手に伝達し、他者の意図を了解するという結果を得るために有効な手段であるという使用価値を、言葉を用いることの中に見出すに至ったのである。言葉をもたない人間にとって、言葉をもつことによりもたらされた「新しい世界の開設」とは、言葉を使うことによる他者との意図の伝達のしあいが可能なものとなった世界を生きることである。しかし、そのような世界を生きる前に、他者との意図の伝達のしあいが可能なものとなった世界に生きている人々の姿を既に見ており、あるいは聞いており、そのことによりもたらされる結果を既に知っていたということを認識することは極めて重要なことである。自分がはじめて言葉を使用した時に、これらの結果がもたらされることを知ることではない。言葉を使用したことにより、他者とのコミュニケーションの成立をはじめて実感するということはあるであろうが、全くはじめて知るというのではないのである。少なくとも、自分が言葉を使用することによりどのような結果がもたらされるかということ、期待ということも含めて既に知っていなければ、他者の言葉を模倣するという形ででも自分が言葉を使用することはおこりえない。言葉を獲得する以前の人間が生きていた世界とは、他者とのコミュニケーションの原理を、自分で行うことにより実感することはできていないにしても、既にその存在を知っており、その素地を獲得している世界なのである。こうしたことを含めて、他者との共通の感覚的世界に生きていたということが、言葉をはじめて発する人間の世界の生き方として考えることができるのである。

ここまでの考察を踏まえ、本論文において、「かさせるふきき」という言葉をはじめて作った時に彼が生きていた世界を改めて解明する試みをしていきたい。彼が言葉をはじめて発する以前に生きていた世界、すなわち、彼の共通の感覚的世界と、そこに含まれているはずの、コミュニケーションの原理あるいは素地とはいかなるものであったのか。それはいかなる仕方で培われたものであったのか、これらのことについて、彼の行動を振り返りつつ、さらに

考察を進めていくこととしたい。

V 考察3：彼が「はじめての言葉」を作った時に生きられていた世界

1 言葉を作る以前に彼が生きていた共通の感覚的世界

彼が「かさせるふきき」という、彼にとっての「はじめての言葉」を作った場面について、改めて考えてみたい。筆者は、彼に対して、はじめは「おかあさん」と書くよう促したのであるが、彼はまず、「か」を選び、「さ」を選び、結果的に「かさ」という言葉を作ることとなった。ここから、彼の表情は極めて生き生きとしたものとなっていき、筆者の問いかけに対する答もはっきりしたものとなっていった。この時に示された彼の姿から、われわれはいかなる意味をよみとることができるであろうか。

ここで彼の言葉を再度見直してみたい。「かさ」を事物の「傘」としてとり、傘を差しながら歩いてここまで来たことを表しているとするならば、「せるふ」は、自分たちで傘をささなければならなかったという意味として（あるいは、雨が「るふ（ふる）」という意味として）とり、「きき」は、気持ちの表現として、危険な状態だった、不安だった、こわかったという意味としてとるならば、その場をともにした筆者と周りの人たちにとって極めて納得でき共感できる言葉としてとらえることができた。

筆者に促されて言葉を作り出した彼は、はじめは、「(お) かあさん」という言葉を作るつもりで文字を選び出したのかもしれないが、結果的に、「かさ」という言葉を作ることとなった。このこと自体がたとえ偶然おこったことであつたとしても、この瞬間、彼は「かさ」という言葉を意味として認識し、「かさ」を主題とした世界を生き始めたのではないだろうか。

「かさ」を主題とする世界とは、彼自身がこの日の朝に体験したことが基となった世界である。つまり、駅から関わりが行われる場所までの道のりで体験したことを主題とした、また、その時に抱いた思いを主題とした世界を、彼はこの時まさに生き始めたのである。傘を差して雨に濡れるのを避けながら、また、多くの人を避けながら進まなければならなかったことにより生じたある種の不安感、焦燥

感、嫌悪感等で一杯となった気持ちを生きていた彼の生が、「かさ」の語とともに再びあらわれた。筆者もこの時、無事に着くように、怪我等をさせないように、人にぶつからないように、できる限り早く着くように等の思いを抱き、この日の天候を恨めしく思いながら、いつもよりも若干緊張しながら歩いていた。こうした感じを抱きつつ生きていたという意味において、つまり、決して快的な感情を抱きながら生きていたわけではなく、少なからぬ不安感を抱きながら生きていたという意味において、筆者と彼は共通の感情を主題とした世界を生きていたといえる。

彼が言葉を作り出し、それが「かさ」という言葉となった時、まさに、メルロー＝ポンティが言うように、言葉そのものが意味をもつようになり、彼は過去の体験としての、駅からの道を不安を抱えながら進んできた世界を再び生き始めた。つまり、「かさ」という言葉そのものが意味をもち、その意味が主題となるような世界を生き始めたのである。今まで生きてきた数多くの場面からこの場面を区別して切り取り、その時の自分の感じを再度生きながら言葉を作ったと考えることができる。

これらのことが可能となったのは、彼が既にある世界を生きていたからであり、その世界がわれわれと共通の世界であったからである。彼は、雨の中傘を差して進んでいる最中、彼自身の思いを言葉として発することはなかったものの、ある種の感じを抱いていたのであり、それらの感じはわれわれと共有することのできるものであつたのである。そういう世界を既に生きていたからこそ、その思いを言葉としてあらわす機会を得た時に、「かさせるふきき」という一つの言葉を作つたのである。

では、そもそも彼が言葉を作つたのはなぜだったのであろうか。われわれと共通の体験をし、共通の感じを抱いたということのみで、言葉を作ることが成立すると考えることはできない。われわれと共通の世界を生きていたことが、さらには、そこに含まれるコミュニケーションの原理あるいは素地を既にもっていたことが、彼の言葉にどのようにつながっていたのかということについて、以下、考察を進めていきたい。

2 彼の生きていた世界に既に含まれているコミュニケーションの原理

「かさ」、「せるふ」、「きき」といった、それぞれの言葉を彼がどこでどのように学んだのか、あるいは知ったのかということについては、今さら解明のしようがない。これらの言葉については、彼が今まで生きてきた中で聞き、触れたことにより知ったとしか考えようがない。おそらくは彼の今までの人生の中でこれらの言葉を聞き、触れることがあったのであろう。そうでなければ、自らこれらの言葉を、一つずつ文字を選ぶという仕方で作ることができるはずはない⁸⁾。

さらに、「言葉」のもつ根本的な意味を、つまりは、「言葉」がどのようなものであり、何をもたらすかということ、原初的な形であるとしても、彼は知っていたと考えざるをえない。そうでなければ彼が、必ずしもスムーズには動かない身体を懸命に動かし、私とのやりとりを懸命に行いながら一つずつ文字を選び言葉を作っていくことを、そもそもしようとはしなかったであろうと考えられる。

メルロー＝ポンティの言を借りるならば、彼は、われわれと共通の感覚的世界に既に根を下ろしていたのであり、その時点で、彼はコミュニケーションの無の状態にはないと考えられる。つまり、他者同士が言葉を用いてコミュニケーションをしている場面を見て知っており、それらを、言葉がもたらす結果を含めて模倣することができる状態にあり、その意味で、他者とのコミュニケーションが可能であるという世界を既に生きていたのである。

彼が、言葉を明確に発するという形ではなくても、他者とのコミュニケーションを生きていたということは、この場面より以前の筆者との関わりのある場面においても示されていた。先述のように、筆者の問いかけに答える、筆者の声かけをきっかけとして身体運動をおこす、自らの身体運動をおこすことが他者の反応をひきおこす等の仕方である。この意味で、彼はコミュニケーションの原理あるいは素地を既に生きていたのである。

2010年2月の場面で、彼ははじめて、コミュニケーションの方法として、「言葉」を用いた。「かさ」という言葉に誘発された彼はその言葉が意味をもつ世界を生き始め、さらに「せるふ」、「きき」という言葉を重ねた。これらの言葉を作ることにより、どの

ような結果を招くかということ、彼は既に知っていたのである。つまり、自分の作る言葉が他者に伝わるという結果を得ることができるということ、今までの筆者との関わりのある場面の中で、あるいは、彼が今まで生きてきた生活の中で、知っていたと考えることができるのである。

彼が、懸命に言葉を作った時、実際に周りの人間はその言葉を受け取り、言葉の意味を考え、彼の気持ちを考え、何を言おうとしているかを懸命に考えようとした。そうしていることを、彼に対して、「～なのかな?」「～じゃないかな?」等の問いかけをしつつ伝えた。この間彼ははずっと満足そうな表情を示し、うれしそうなお声を出していた。

こうした周りの反応は、まさに彼が望む結果だったのではないかと考えられる。まさにこの時、彼は、言葉を作ったということが、他者とのコミュニケーションを引き起こすという、自分の望む結果をもたらしたことを実感することができたのではないだろうか。彼は、こうなることを既に知っており、コミュニケーションの原理あるいは素地を既に生きており、だからこそ、一つずつ文字を選び、懸命に自分なりの言葉を作ろうとしたのではないかと筆者は考えたのである。

ここまで考察を進めてきて、彼が言葉を用いる世界を生きようとした時に、周りの「他者」の存在は極めて大きな意味をもつこととなっていたと考えることができるようになる。ここで改めて、はじめての言葉が作られた時の他者の役割について、考察を進めてみたい。

3 はじめての言葉が作られた時の他者の役割

彼が言葉を作った時、直接の聞き手である筆者は当然のこと、周りには他にも、彼の言葉を聞く、あるいは見る人間がいた。このことの意味を考えてみたい。

彼の作った言葉、「かさせるふきき」は、日本語の文章として完全なものではなかった。彼は、ある文字と他の文字をつなぎ合わせれば一つの言葉となることを既に知っており、ごく限られたものではあったかもしれないが、言葉として作ることができる状態にあった。しかし、それらの単語同士のつなげ方は、日本語の文法等に即した、いわゆる言語体系に即した並べ方ではなかったため、彼が作った言

葉の意味は、他者に正確に伝えられていたとは必ずしも言えない。彼は、一つ一つの単語をつなげることを知ってはいても、そのつなげ方を、すなわち、日本語の文法等、言語体系を習得していたとは言い難かった。だから、日本語の文章としては不完全な「かさせるふきき」という言葉を彼は作ったのである。

しかし、だからこそ、筆者を含めた彼の周りにいた人間は、彼の作った言葉の意味を懸命に考えようとした。まず、この日の駅からの道のりのことを表現しているのではないかというところから始め、さらに、雨が降っていて彼の表情も険しいものであったことを思い返し、「きき」と表現するほどに不安だったのではないかという彼の気持ちを懸命に推測し共感しようとした。これらのことを、筆者を含めた彼の周りにいた人間は、つまりは彼にとっての「他者」は、彼の作った言葉が必ずしも完全な文章となっていなかったからこそ、より懸命に彼の言葉の意味を考え、作った本人である彼に言葉の意味を訊ね、彼の表現しようとした事柄を理解しようとし、彼の気持ちに寄り添おうとし、さらに、そうしていることを彼に伝えようとした。彼はこの間、終始うれしそう、満足そうな表情を示していた。筆者を含めた周りにいる人間の、すなわち彼にとっての他者のこれらの反応は、彼にとって極めて満足できるものであったと考えることができるのである。

ここで改めて考えてみたい。もし、自らにとっての他者が周りにいなかったならば、彼はこれほど懸命に言葉を作ろうとし、言葉の世界を生きようとしたであろうか。彼はこの時既にコミュニケーションの原理を、あるいは素地を生きていた。そうであるからこそ、コミュニケーションの道具としての言葉を作ろうとしたのであり、それによりもたらされる結果として、自らの作った言葉の意味が他者に伝わるということ、すなわち、彼がどのような世界を生きていたか、どのような気持ちを生きていたかということが他者に伝わるということがもたらされなければならなかった。つまり、伝えられるべき対象としての「他者」は、彼が言葉を作り言葉の世界を生きようとする際に、絶対的に必要な存在であったのである。

言葉を作ることが何を自分にもたらすかをはじめて実感した彼は、他者の存在を、以前よりもさらに

重要な役割を果たしている存在として気づくことができたのではないだろうか。彼にとっての他者の存在は、彼がこの時まで生きてきたあらゆる生活を通して成立してきたと考えられる。しかし特に、彼と関わりの場面に彼とともにしてきた筆者は、さらには関わりの場面に彼の側にいた人たちは、彼に常に問いかけ、語りかけ、それに対する彼の、必ずしも大きくはない反応に対しても、それを受けたことを伝え続け、また、彼のほんのわずかな動きや表情の変化等も見逃さないように注意深く見続け応え続けてきた。こうしたことの積み重ねもまた、自分の思いや考えに応える他者の存在の成立に意味のあるものとなっていたと筆者は考える。さらに言うならば、彼にとってのコミュニケーションの原理あるいは素地には他者の成立というものが確実に含まれており、先に述べたことの積み重ねによって他者が成立することにより、言葉の世界を生きることもまた成立するようになったと、筆者は考えることができるようになったのである。

おわりに

本論文を閉じるにあたり、彼にとっての「はじめての言葉」の意味を改めて考えてみたい。先述したように、彼は、筆者との関わりの場面等において、われわれとの共通の感覚的世界を既に生きており、その中でコミュニケーションの原理あるいは素地を既に生きていたと考えることができた。その上で、2010年2月の関わりの場面での「かさせるふきき」というはじめての言葉が彼により作られたのである。しかし、彼との関わりの場面をこの時点まで重ねてきた筆者にとって、彼のこの行動は、若干唐突に感じられるものであった。なぜならば、筆者は彼と、言葉をテーマとした学習を必ずしも充分にしていたとは言えないと感じていたからである。彼との関わりの場面で、筆者は彼に、「かさ」という言葉の意味を教えたことはなく、「せるふ」、「きき」という言葉についても同様であった。さらには、彼との関わりの場面で、50音の文字学習をしたこともなかった。にもかかわらず、彼は、50音の文字が順次流れてくるパソコンの文字選択ワープロソフトを使って、筆者の介助を受けながらではあるものの、はじめての言葉を作ったのである。彼との関わりを

重ねてきた筆者にとって、いかなる学習が根拠となつてこの行動に至つたのか、理解できない事態でもあつたというのが、関わり手として抱いた正直な気持ちでもあつた。

しかし、筆者にとって唐突と見える事柄であつたとしても、当の本人にとって唐突であつたとは全く考えられない。彼の中では積み重ねられたものが確実にあり、その結果としてのこの行動があつたと考えざるをえないのである。彼が何をどのように積み重ねてきたのかを、筆者は明らかにしなければならなくなつた。本論文で筆者は、メルロー＝ポンティの言語論を導きとしながら、彼が、言語以前の世界であるものの、われわれと共通の世界を既に生きていたことを明らかにすることができ、さらに、その世界の中に含まれるコミュニケーションの原理あるいは素地を既に生きていたことをも明らかにすることができた。これらは、筆者との関わり場面でも積み重ねることができてきたことである。筆者は関わり場面彼に話しかけ続け、問いかけ続け、一緒に課題に取り組み続けた。彼はそれらに対して、彼なりの仕方では答え続けてきた。彼は言葉を発することはなかつたとしても、コミュニケーションの原理あるいは素地と呼べるものを積み重ねてきたのではないだろうか。さらに、関わり場面で筆者が課題を呈示し彼がそれに対して彼なりの仕方では答え続けることも、彼との共通の世界を築き、その世界を生き続けることにつながつていたのではないだろうか。彼が何をどのように積み重ね、その結果、彼が今どのような世界を築き生きているのかということについては、今の彼から改めて学ばなければならない。積み重ねてきた結果としての彼の世界の豊かさ、深さを、どのような言葉で表現することができるのか、このことについて、彼の言葉をさらに聴き続け、彼と世界をともに生き続ける中で考えていくことこそが、筆者の今後の課題である⁹⁾。

注

- 1) 彼が中学部二年生に在籍していた2001年末より2003年秋まで、約一年半の間、月に一回の頻度で関わりを行うことができた。
- 2) 彼の障害としては、水頭症ならびに視覚障害という診断がなされている。
- 3) 彼に対して課題として呈示した主たる教材を記

しておく。

①足踏みスイッチ：スイッチ板を押すとスイッチが入り音が鳴る。寝た姿勢でいる彼に対して足元に呈示すると、彼は筆者のかけ声に応じて足を動かし板を押したり蹴ったりして音を鳴らしていた。

②フレキシブルスイッチ：上下左右方向に棒状の取っ手を動かすとスイッチが入り音が鳴る。比較的小さな動きでスイッチが入るので、必ずしも大きく動くわけではない彼の手の運動を促す際に呈示した。彼は、筆者のかけ声に応じて、主に手の甲を取っ手にあててスイッチを入れ、音を鳴らしていた。

③はめ板：「板を面上をすべらせて動かし穴にはめる」ことを課題とした教材である。穴まで枠を作り、その枠に沿って動かして穴にはめる場合や、四角の枠の隅に穴を置き、穴の位置を探してはめる場合や、枠等がない状態で穴の位置を探してはめる場合など、様々な形ではめ板を呈示した。はじめのうちは穴に板をはめること自体が彼にとって困難な身体運動となつていたが、次第に無理なく板をはめることができるようになり、さらに、自ら穴の位置を探して板をはめることもできるようになった。これらの教材は、彼との関わりにおいて、最も多くの場面で用い、彼もまた、極めて積極的に取り組んだ課題であつた。

④筒抜き：棒にはまっている筒を棒から抜き取ることを課題とした教材である。自ら手を開きものをつかむことは彼にとって困難な身体運動であつたが、筆者がガイドして筒をつかませると、彼はそれを棒の方向に沿って動かして抜き取ろうとした。さらに、抜き取った筒をそのまま下に下ろしてきて、棒にはめていき、そこで自ら手を放して身体運動を終えることまで行うようになった。

これらの他にも、様々な教材を用いながら、彼が自ら身体運動をおこし、自らの望む結果を得ることを目指して取り組もうとすることができ課題を呈示し、関わり場面を作っていくよう筆者は努めた。

- 4) パソコンの50音の文字選択ワープロソフトを用いて障害のある子どもが言葉を綴る実践につい

て、筆者は、柴田保之氏の実践に学び参考にした。この道具を用いた実践については、柴田氏の下記の著書を参照されたい。

柴田保之 2012 『みんな言葉を持っていた』
オクムラ書店

- 5) 筆者は、筆者の手を彼に握らせ、その手をパソコンのスイッチに触れさせるところから関わりを始めた。このような状況を作ることにより、彼が、他から見ていただけではわからないほどに小さな動きをおこしたり、少しでも手に力を入れたりしたならば、彼に手を握られている筆者はすぐにそれを感じ対応することができるからである。
- 6) いわゆる「概念学習」のレベルの学習は進めてきていた。身体運動面ではかなりの制限がある状況の中で、○の筒を○の棒に、□の筒を□の棒に入れるというように、形という概念によってつかんだものを弁別することは可能となっていた。いわゆる、ある事物から感覚的に発するものに基づく行動のみならず、その事物のある概念に沿って区別、整理をすることが可能となっていたという意味で、記号、文字、言葉の世界に入る準備はできていたのではないかと筆者は考える。
- 7) 「メルロー＝ポンティ」の日本語表記については、「メルロー＝ポンティ」とあらわしたり、「メルロ＝ポンティ」とあらわしたりするなど、必ずしも統一されていない。本論文では、『知覚の現象学』の日本語訳にしたがい、「メルロー＝ポンティ」という表記に統一することとする。
- 8) 「かさ」、「せるふ」、「きき」という言葉を彼が知っていたことの理由として、一つのことを考えられる。それは、彼にとって極めて強い情動と結びついた事柄や場面において使われた言葉が、彼にとって極めて強く印象づけられたのではないかということである。先述したように、雨に濡れることを極端に嫌がる彼にとって、そうした場面で使われる言葉、例えば「かさ」であったり「ふる（るふ）」であったり、そうした言葉が彼の言葉ともなったのではないかと考えられる。彼がこの時点でどのような言葉をもっていたかを全て知ることはできないが、何らかの情動を動かされた場面において使われた言葉

が彼の言葉として積み重ねられていったのではないかと筆者は考えるのである。

- 9) 2010年2月の場面以降も、筆者は彼との関わりの中で、彼に言葉を作ることを促し続けた。彼は、ある時には、はじめての言葉を作った場面と同様に、極めて意欲的に言葉を作ろうとすることもあったが、ある時には、全く興味を示していないかのように筆者の問いかけに答えようとせず、言葉を作ろうとしないこともあった。彼が最も明確に言葉を作ったのは、2011年8月の関わりの中でのことであった。この時、彼は、アグラ座位の姿勢でしばらく課題に取り組んでいた。はじめのうちは意欲的に課題に取り組んでいたものの、次第に極めて機嫌の悪い様子を見せるようになり、不快な声を出したり表情を示したりしはじめた。それがしばらく続いたので、筆者は、これ以上この姿勢で行うのは無理であると判断し、彼を一旦仰向けの姿勢で寝かせた。筆者は、その状態にいる彼に、「何がよくなかったのかな、嫌な事があったら聞かせてくれますか」と問うた上で、彼に言葉を作ることを促した。はじめての言葉を作った時と同様に、あ行から順に聞いていくと、何度か作り直しをしながら、最終的に彼は、「しせい」という言葉を作った。つまり彼は、アグラ座位の姿勢がよくなかったという思いと、その姿勢を変えてほしいという希望を筆者に言葉で伝えてきたのである。これに対して筆者は、「そうか、姿勢がよくなかったんだね」と答えながら、アグラ座位ではなく、椅子に座る姿勢を作って改めて彼に課題を呈示した。すると彼は、今度はしっかりと課題に意欲的に取り組み、それを続けたのである。この時筆者は、彼が明確に筆者の「嫌な事はなんですか」という問いかけに答えたこととともに、彼との関わりの中で、長年にわたって彼の身体の支え方等を考える中で、彼の姿勢についても重要なテーマとしてきたことを、さらに、そのことを彼にも「しせい」という言葉を何度も使うことで伝えてきたことを改めて思い返し、彼がまさにその言葉を作ったことに深い感動をおぼえたのである。

引用文献

- 福田学 2010 『フランス語初期学習者の経験解明—メルロ
＝ポンティの言語論に基づく事例研究—』 風間書房
- メルロー＝ポンティ,M (竹内芳郎、小木貞孝訳) 1967 『知
覚の現象学1』 みすず書房
- メルロー＝ポンティ,M (竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳)
1974 『知覚の現象学2』 みすず書房
- メルロー＝ポンティ,M (滝浦静雄、木田元訳) 1979 『世界
の散文』 みすず書房
- メルロー＝ポンティ,M (木田元、鯨岡峻訳) 1993 『意識と
言語の獲得 ソルボンヌ講義1』 みすず書房
- 齋藤瞳 2009 「メルロー＝ポンティの言語獲得理論—初期言
語論から中期言語論へ—」(日本現象学会編『現象学年報
25』 pp.133-140所収)